

御^{おん}馬^ま神^{じん}社^{しゃ}の^の由^ゆ来^{らい}と日^に本^{ぽん}の^の神^{かみ}話^わ

間^ま明^{ぎら}の^の氏^{うじ}子^こが^が伝^{つた}え^える^る歴^れ史^{きし}と^と伝^{でん}説^{せつ}

日本の神話と神々の系譜

高天原に三柱の神が現れる

天之御中主神

宇宙の根源をなす神

高御産巢日神

生成力の神

神産巢日神

生命の復活と再生を司る神

神代七代を経て

伊邪那岐命

伊邪那美命

この夫婦二柱の神が日本本土と八つの島を生み、さらに35柱の神を生みました。

しかし、女神である伊邪那美命が火の神生んだ際に火傷を負い、命尽き黄泉国へと旅立つちます。

悲しみに暮れる伊邪那岐命は、妻であった伊邪那美命を連れ戻しに黄泉国へ行くも、追いつかずに返されてしまうのです。

そして伊邪那岐命は黄泉国より戻った際に、体の穢れを江戸で落としたりと三貴神を生んだのでした。

三貴神

あまてらすおおみかみ
天照大御神

ひだりめ 左目を洗つて生まれた。太陽を司る神とされ、高天原を治めるよう任される。

つくよみのみこと
月読命

みぎめ 右目を洗つて生まれた。アマテラスと対し月を司るとされ、夜の神とされる。

たけはやすさのおのみこと
建速須佐之男命

はな 鼻を洗つて生まれた。海原を治めよと任されるも……。

古事記の中で

あま
天の岩戸

あまてらすおおみかみ 天照大御神(太陽の神)は、高天原において弟・須佐之男命の悪行に愛想を尽かし、天岩戸に籠つてしまう。

いこう 以降は高天原も葦原中国も光は失われ、闇が覆い、様々な禍事が荒れ狂つたのです。

うれ や これを憂いた八百万の神達が集い対策を考えました。

や お よろず そして八百万の神達と共に、岩戸の前で賑やかに歌い踊り、またそれに呼応して神々が大きく笑つたという。

あまてらすおおみかみ すると天照大御神は不思議に思い、岩戸を開けて外を窺おう

と岩戸をそつと開けてみたところ、神々はその身をさつと引つ張り出し、すぐさま岩戸を閉じ注連縄で固く封じてしまいました。これで元の通り明るい世界が戻つてきました。しかし、須佐之男命がまた悪さをしないと限らないので、高天原から追放してしまいました。

八岐大蛇討伐

あてを失つた須佐之男命は葦原中国を奔放と流離い歩いていると、一筋の川にたどり着き、近づいてみるとその上流から箸が流れてきました。

これを見た須佐之男命は、上流には人が住んでいるのだと確信し、この川を上つていくと老夫婦と娘が居る建物にたどり着くことができました。

しかし、この三人は須佐之男命と出会つてからずつと泣いています。理由を聞くと、この娘を八岐大蛇に差し出さなければならぬのだと言います。

そこで一計を案じた須佐之男命は、老夫婦に八つの大樽を用意させその中を酒でつるつるに満たしたのです。

また、泣き続けていた娘を髪飾りの櫛へと姿を変えさせ安全な自分の頭に刺し、八岐大蛇を待っていると、案の定八岐大蛇は酒樽に首を突つ込みがぶがぶと飲み干し、酔つてその場で寝てしまいました。

須佐之男命は寝入っている大蛇の首を一つずつ切り落としてくと、最後の八つめの首を切り落とした時に、中から一振りの剣が見出されます。

これを草薙乃劍とし、須佐之男命の宝劍となりました。
また、櫛に姿を変えていた娘は、櫛名田比売と名を表し、
須佐之男命の妻となり子を成すに至るのです。
この夫婦の六代目の子孫こそ名を大国主命、又の名をオオア
ナムジノカミともいいます。

因幡の白兔

時代は移り、大国主命の話となります。

大国主命は、世に響き渡る程に美しい因幡の国の八上比売
に求婚するために、兄弟達と揃って出かけ、道中気多（現在の
鳥取県）の岬にたどり着く。

すると、鰐に皮を剥がされた兔が鳴いていた。

それを見た大国主命は兔に、川で体を洗い蒲黄の穂を敷き
詰めた上で寝転がりなさいと教えます。

正しい治療法を教えた大国主命に、兔は言いました。

八上比売はきつと貴方と結婚する事になるでしょう、と。

この予言通り、八上比売は大国主命との結婚を望むが、先行
していた兄弟達はそれを快く思わなかった。

嫉妬と邪心に捕らわれた兄弟は、大国主命の命を脅かす
妨害を繰り返し、大国主命は困り果て、須佐之男命が今も根
の堅州国に居ると聞き、そこへ向かう事となります。

この道中、須佐之男命の娘である須世理毘売と恋に落ちるの
ですが、須佐之男命はすぐにこれを認めませんでした。

須佐之男命から、命をかけた無理難題を出されるも、勇気と
知力を示した大国主命は、須佐之男命から須世理毘売を正
妻と娶り葦原中国を治めるよう言い渡されたのです。

国譲り

あしはらのなかつくに おおくにぬしのみこと
葦原中国を治めていた大国主命だが、ある時高天原から二
柱の神が訪れた。

あまてらすおおみかみ
「天照大神とタカギノカミより、天照大神の子孫がこの
あしはらのなかつくに おさ
葦原中国を治めるよういわれた。どうだろうか。」

おおくにぬしのみこと
これに大国主命は、須佐之男命より任されている国を簡単に
譲るわけにいかないのので答えられぬとし、大国主命の子である
事代主と建御名方に問うてみよと言ひ渡す。

たけみかづち ふたり はなし
武甕槌はこれら二人と話をし、承知を得、再び大国主命と
話し合う。

とき おおくにぬしのみこと
この時、大国主命はこう言ひ渡した。

わたし わ
「私は我が子達の考えと同じです。この国をお譲りします。し
かし、高天原へ届く程の高い床を持った宮殿を建造して下さい。
わたしはそこに住む事にします。」

いま いずもたいしや きゆうでん な きづきのみや
これが今の出雲大社であり、宮殿の名は杵築宮とも言われて
いる。

たけみかづち あしはらのなかつくに おさ
こうして武甕槌は葦原中国を治める算段を整えた事を、天
照大神に伝えたのでした。

ぐにゆず
これを、国譲りと言います。

天孫降臨

あまてらすおおみかみ まご
天照大神は孫であるニギノミコトを葦原中国統治の為に

たかまがはら あまくた
高天原から天降りさせます。

たかまがはら あしはらのなかつくに どうちゆう くも
高天原から葦原中国への道中は、雲をかき分け、森の木々を

縫い飛び歩くとても大変な道中でありました。

この時、猿田彦神の導きで、ようやく日向の高千穂（現在の九州は宮崎）へたどり着きます。

これを、天孫降臨と呼び、この時に天照大神の魂として三種の神器も共にこの国へと降り立つ事になりました。

これより後、この天照大神とニギノミコトの直系である神武天皇が引き継ぎ、この時を以て日本国の誕生とされます。

今上天皇（現在の天皇）は第百二十五代目となる。

御馬神社の由来

所在地

石川県 金沢市 間明一丁目 八十五番地

（旧石川郡米丸村 字 間明 2129 番地）

面積

1765.5 平方メートル

祭神

高皇産霊尊 …… 天地万有の造化の一神

保食の神 …… 全ての食物の神

菅原道真公 …… 学問の神

祭礼日

歳旦祭 (一月一日)

春祭り・祈年祭 (三月二十一日)

秋祭り (九月二十一日)

新嘗祭 (二月二十五日)

月次祭 (右記祭礼の無い毎月の二十一日)

由緒

当社の創建年代は不詳であるが、延喜式の神明帳(927年編纂)に記載されている「御馬神社」は当社であるとも言われている。

また、当社に関する伝承では、中世以降兵火に遭い社殿喪失の為、仮殿を造り神器・古文書などは村史「宮本次郎兵衛」が一時保管したとのことである。

その後、藩政後期の文政六年(1833年)の出火で、神器・古文書をはじめ三代藩主前田利常寄贈の下馬札も消失した旨の言い伝えもある。

当社は明治当初の一時、間明神社と改称したことがあつたが、明治十四年十月再び御馬神社に復している。

明治四年には村社に、同三十九年十二月には神饌幣帛料共進神社に、それぞれ指定されている。

昭和四十年九月には玉垣を整備し、同四十八年十月には土地改良区画整理事業の完成を記念して、社殿・鳥居・手水舎・神馬等を改新築し、同五十七年九月には拝殿の瓦葺き替え工事を行う等、社殿及び整備に努め、現在に至っている。

金沢市指定保存樹木

ケヤキの大木	：	参道中程左側、樹齡300年
ケヤキの大木	：	拝殿右側、樹齡200年

鳥居なしの宮

藩政後期に柴野美啓著によると、「往事村民が鳥居を建立したところ、その後倒壊し四十数名が神罰で頭が禿げた。」との伝承がある。

これより、「鳥居なしの宮」とも呼ばれている。

式内社

式内社とは、延喜式巻九、巻十の神明帳（927年）に掲載されている神社を云う。

その社数は全国で2861社あり、うち石川県関係では加賀に6社、能登に6社が挙げられる。

御馬神社は加賀式内社6社（石川郡10社）の一社として挙げられているが、同名の神社が同国石川郡内に6社あるところから、その確定に關し明治初頭以来意見の相違が見られている。同郡内の御馬神社6社の鎮座地は金沢市間明町1-85と他の一社は金沢市久安1-178である。

両神社とも確たるものはなく、お互いに当社が式内社であると主張している。

御馬神社の氏子・間明の町の移り変わり :

(寛文十年、1670年)

藩政時代は石川郡間明村と称し、家高は7軒、百姓は14人であった。

(宝永五年、1708年)

その後、家数29軒、人数170人、馬5匹となっている。

(明治二年、1869年)

家数37、人数176人、馬5匹となる。

作物は、穀物の他、茄子の栽培が盛んであった。

(明治四年、1871年)

廃藩置県により金沢藩は金沢県となり、翌五年石川県となる。

(明治六年、1873年)

御馬神社境内に高畠小学校が開設される。

(明治九年、1876年)

戸数34戸、人数209人(男97人・女112人)となっている。

産物として、穀物、蔬菜、麻、菜種等を産出し、金沢町に売出していた。

(明治二十二年、1889年)

4月、市町村制移行に伴い石川郡間明村は新行政村米丸村の一字となり、米丸村字間明と称することになる。

戸数31戸、人口216人であった。

戸数及び人口の多さもあり、間明では区長が置かれ、米丸村役場との円滑な意思疎通が図られることとなった。

(昭和十年、1935年)

12月、石川郡米丸村が金沢市に編入される。
これにより、同村字間明は金沢市間明町となる。
戸数30戸、人口175人。

(昭和三十三年、1958年)

間明町の東南部の一部が米丸町になる。

(昭和四十年、1965年)

間明町西部の一部が進和町となる。

(昭和四十五年、1970年)

世帯数69世帯、人口313人。

この頃、間明地区ではその中央に野田専光寺線(西インター通り)の自動車舗装道路の開設を目指して土地区画整理組合が結成された。

2月、この土地区画整理により、西インター通りを挟んで北側が住宅地、南側が準工業地となった。

これとほぼ時を同じくして、北側の住宅地が間明一丁目、南側が間明2丁目となった。

(昭和五十六年、1981年)

世帯数は316世帯を数え、人口914人と大きく飛躍した。

平成二十七年

五月十五日

村^{むら}
田^た

正^{ただし}
著

校正 田中正真